

考え直す、自然との距離

『セミ・ドメスティケーション』著：松井健(2011年 エイエヌ)

二見 竜誠

セミ・ドメスティケーション。耳慣れない言葉である。日本語に訳すると半栽培となるが、これでもまだ具体的なイメージは湧かないだろう。難しい言葉で捉えるとわかりにくいかもしれないが、実はこの考え方は日本人にとってなじみ深いものではないか、と私は思う。例えば、田舎に祖父母の家があったとする。そこでは家の裏の山を管理していて、毎年季節毎にキノコや、山菜などを取りに行ったりする。そのような事は日本人にとって想像に難くない。手をかけるわけではないが、利用しないわけではない。簡単に言えば、これがセミ・ドメスティケーションだ。

本書ではセミ・ドメスティケーションを「長期的で安定的な動植物との関係のなかで築かれるものである」としており、特徴としてそのような密な関係にも関わらず「遺伝的変化を与えるまでには至っていない」という点が挙げられる。人間の目的のために大切に保護し、管理され、その生存や行動、遺伝的性質に至るまで影響を与えるドメスティケーションとは大きく異なる。このような前提をもとに世界中の植物や牧畜、果ては虫などの様々なセミ・ドメスティケーションの事例をあげ、ドメスティケーションの起源について考察していくというのが著者の目的である。

さて、農業の近代化をはじめとして科学の発展と共に、自然とのかかわり方が昔とは大きく変わった現在、このような非効率的なかわり方はどのような意味を持ってくるであろうか。一定の距離を保ちながら関わり続ける、という点は一つの重要なポイントではないかと私は思う。現在の私たちの自然との関係性は、間違いなく支配-従属の関係であると思う。私たちは自然の上に立ち、自然をコントロールしようとしてきた。しかし、このセミ・ドメスティケーションの概念において、自然と人間は従属関係ではない。人間の生活は特定の自然に大きく依存しながらも、決してその距離を詰めすぎない。植物も人間に影響されることなくその命を繋いでいく。そのような関係が長期で安定的に続いていき、人間の植物に対する理解も次第に深まっていく。このように、セミ・ドメスティケーションの状態において、われわれ人間と自然は共に生きている。敢えて距離を置く親子のようなこの関係はもはや愛とさえ呼んでも差し支えないのではないだろうか。

現在において、この概念を実行できるかと言われれば、さすがに無理も生じるかもしれない。しかし、放置するわけでもなく、手を入れ改変していくわけでもない、この自然とのなんとも言えない距離感。本書で終始取り扱われているセミ・ドメスティケーションを手掛かりに、その距離感について今一度、考えてみてもいいのではないだろうか。かつての日本人たちが、日常的に築き上げてきたその距離感について。